

5 ブドウの水平整枝における受光態勢

ねらいと成果

近年、県下のブドウ産地でも担い手の高齢化、女性化が一段と進み、従来の平棚整枝栽培では長時間両腕を上げたままの立ち作業を強いられるため、管理作業の快適化と軽労働化が強く望まれている。このため、本県では管理作業の楽な水平整枝（垣根一文字）整枝法を開発し、現在、高品質果実を安定生産するための栽培条件について調査を進めている。今回、整枝法による葉および果房の受光態勢の違いを検討した結果、着色期における新整枝法の葉の受光態勢は、平棚整枝より優れていることを明らかにした。また、果房では整枝法による差は少ないものの、新整枝法では主枝側の日射量が通路側より低かった。

内容

1 相対日射量の測定

積算日射量が簡易に測定できる日射計フィルム（大きさ35mm×20mm）を用いて、水平整枝および平棚整枝の10年生「ピオーネ」で行った。葉への日射量は、結果枝の全葉に日射計フィルムを各区約150か所貼り付けて、開花期（6月上旬）、着色期（7月中旬）に測定した。果房については、果実袋の内側に2枚ずつ（主枝側と通路側）日射計フィ

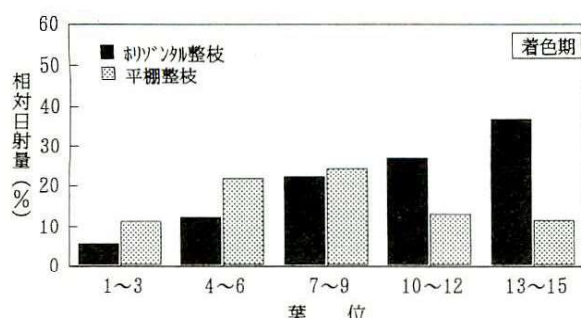
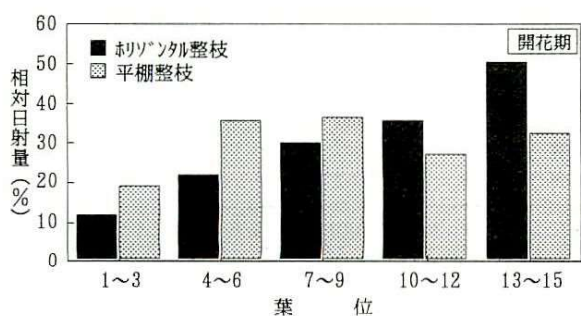


図1 「ピオーネ」における葉別相対日射量

ルムを貼り付け、各区計20か所で着色期（8月中旬）に測定した。測定期間はそれぞれ4日間で、日射量の表示は全天面日射量に対する相対日射量（%）とした。

2 葉の相対日射量

葉の相対日射量は水平整枝では枝の先端になるほど増加するのに対し、平棚整枝では誘引部位から下垂し始める7~9節が最も高く、その前後は低くなった。着色期の相対日射量は両整枝法とも開花期に比べて低下し、この傾向は成葉化に伴って枝がほぼ垂直に下垂する平棚整枝で顕著であった（図1）。

ブドウの葉は成葉化するまでに2週間から1か月を要し、展葉直後の若い葉は光合成能力が低い。開花期では8~9節までの葉、着色期では全葉が成葉化していた。開花期の相対日射量は成葉化している9節までは、平棚整枝が水平整枝に比べて高く、平棚整枝の受光態勢が優れていた。一方、着色期になると、遅くとも7月上旬には全葉が成葉化しているため、逆に水平整枝が平棚整枝に比べて受光態勢が優れ、着色に重要な果粒軟化期から着色初期の養分蓄積に有利であると考えられた。

3 果房の相対日射量

果実袋内での受光量は、主枝側と通路側の合計では整枝法による大きな差はなかったが、水平整枝では主枝側と通路側で差が生じやすい傾向であった（図2）。

今後の方針

両整枝法とも被袋下ではかなり果房に到達する日射量が低いと考えられ、袋掛けの方法や反射マルチの利用など果房付近の光環境改善策を考える必要がある。 福井謙一郎（農業技セ・園芸部）

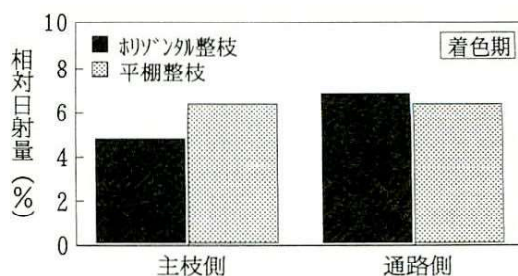


図2 「ピオーネ」における果実袋内の相対日射量